今、語りつぐ戦争の体験

平和への願いをこめて

二〇〇七

港区戦争・戦災体験集 第二集

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つこどもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、わが国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和六十年八月十五日

港区

港区平和都市宣言 20周年の記録

港区では、昭和60年8月15日、核兵器の廃絶と、世界の恒久平和を願い、港区平和都市宣言を行いました。宣言を行ってから20年目の節目となる平成17年度を中心に、平和都市宣言の趣旨の普及・啓発のためさまざまな事業を実施しました。

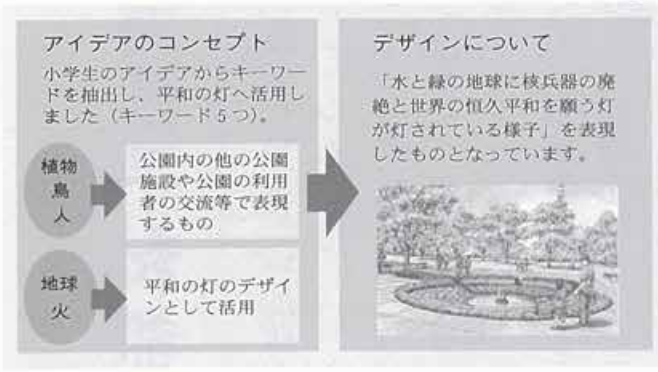
平和の灯の設置（平成17年8月15日）

●設置にいたるまで●

港区基本計画（平成15年3月）で設置を決定し、平成16年度の設計段階から幅広く意見を求めてきました。

区内の小学校6年生を中心にアイデアを募集（総計561点の応募）。平和の灯検討会でデザイン作成の考えを整理し、デザイン4案を作成し、区民の意見を募集しました。

また、芝公園本格整備基本計画策定のための住民参画のワークショップと連携しながら計画を進め、「平和の灯」のデザインを決定しました。



●採火●

平和の灯は、平和都市宣言の「核兵器廃絶と恒久平和の願い」を表現するため、被爆地である広島市の「平和の灯」、長崎市にある「ナガサキ誓いの火」、被爆地広島の原爆の火を灯し続けている福岡県星野村の3箇所から火を受け継ぎました。

広島市「平和の灯」

長崎市
「ナガサキ誓いの火」

星野村「平和の火」

採火

●20周年プレイベント●

平和都市宣言20周年の前日（8月14日）に、赤坂区民センターで区民参加型の朗読会をNPO日本朗読文化協会と共催で実施しました。

●設置記念式典●

平和都市宣言から20年目の平成17年8月15日、区立芝公園にて平和の灯設置記念式典を行いました。

式典では広島の火を区議会議長が、長崎の火を平和青年団が、星野村の火を区長が持ち、一つにあわせ平和の灯を点灯しました。また、被爆二世の樹の植樹を行いました。

平和の灯

記念式典

点灯式

平和展の開催（平成17年8月実施）

毎年8月に平和の尊さを訴えるため、平和展を開催しています。平和都市宣言20周年にあたる平成17年度は、展示内容の充実、会場数の拡大と、開催期間の延長を行い実施しました。メイン展示会場となる区役所ロビーでは、長崎市から借り受けた被爆物品の展示や映像による展示、ミニコンサートの実施、そのほかの会場では会場別にテーマを設け実施しました。また、各会場をめぐるウォークラリーも実施しました。さらに郷土資料館では特別展の開催、区内の図書館では平和映画会を実施しました。各会場では、平和への折り鶴の呼びかけや、メッセージリーフ、平和への想い一行詩募集（後述）などを行いました。折り鶴は18年度に広島・長崎等に届けました。

平和展

各会場では、平和への折り鶴の呼びかけ他、メッセージリーフ、平和への想い一行詩募集（後述）などを行いました。折り鶴は18年度に広島・長崎等に届けました。

巡回平和メッセージ展（平成17年9月～11月）

平和メッセージパネル

小学校5校で身近に平和を考えるきっかけとして著名人による平和メッセージのパネル展を実施しました。

平和への想い一行詩募集（平成17年9月～12月）

区民の皆さんが気軽に参加でき、平和を考えていただく機会として、平和への想い1行詩募集を8月から12月まで行いました。戦時中の体験のある方から保育園児まで、さまざまな年代の方から、心をうつ作品（一般115点、ジュニア562点）の応募がありました。

審査委員としてサンプラザ中野さん（ミュージシャン）、田中章義さん（歌人）、中嶋朋子さん（女優）の3名を迎え、厳正なる審査のうえ受賞作品を決定しました（各部門で最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作10点が選ばれました）。

平和青年団

被爆地での現地研修やさまざまな体験を通じて、主体的に平和を築く意識を醸造することを目的に、平和青年団を被爆地長崎に派遣しました。

17年度は20周年事業として設置した平和の灯の採灯や区民まつりでの折り鶴募集、その他の自主的な活動などさまざまな取組みをしました。平成18年2月19日、麻布区民センターで内容の濃い活動報告会を実施し、多くの方に平和の尊さを訴えました。

長崎での採火

ミニ平和展

戦時中の暮らし（衣・食・住）を再現したセットを用意し、子どもたちが集う児童館など7ヵ所でミニ平和展を実施しました。この啓発セットは子ども向けの書籍、ビデオ、物品（戦時中の生活用品の復刻版）で構成されています。町会や地域など、子どもたちが集う場所で「よむ」「みる」「つかう」ことで戦争・戦災体験の語り継ぎや平和の尊さを考える機会として貸し出しも行っています。

啓発セット

港区平和都市宣言20周年事業 ～Peace Message 3.18～ 地球を枕に夢を育む

平和を考えていただく機会として、区民のどなたでもわかりやすいテーマで20周年行事を実施しました。第一部では、平和への想い一行詩表彰と、平和をテーマにした歌の斉唱を行いました。第二部では、サンプラザ中野さん（ミュージシャン）、田中章義さん（歌人）、中嶋朋子さん（女優）と平和青年団によるトークセッションを実施しました。また、同時開催として、著名人の平和メッセージ展、空襲と港区など平和に関する展示を実施しました。

軍隊

神風特別攻撃隊／毎日新聞

召集令状

毎日新聞

学徒動員　雨の神宮外苑／毎日新聞

毎日新聞

千人針／昭和館

毎日新聞

毎日新聞

中国・戦時下の吉林省

外地

戦前の大連（中国）港の埠頭

毎日新聞

戦時下のくらし

港区　レプリカ

港区　レプリカ

昭和館

パン購入券

衣料切符

昭和館

昭和館

家庭用品購入通帳

家庭用塩購入券

戦後スミで消した教科書／昭和館

東京都

東京都

奉安殿と小学生／毎日新聞

空襲

雨のように降ってくる焼夷弾
悲鳴、焼死体、焼け野原

毎日新聞

焼夷弾／東京都

落ちてくる焼夷弾／毎日新聞

タンカをとっての救済／毎日新聞

八田 利子　画

毎日新聞

焼け野原　国会議事堂／毎日新聞

昭和館

昭和館

うちに帰りたい

学童疎開の日々

疎開

全国疎開学童連絡協議会　小島義一　画

終戦後の港区

「漆畑廣作氏作成の戦災跡の東京風景」
東京都復興記念館所蔵

赤坂見附上より

日枝神社

増上寺山門

増上寺

三田小山町より麻布方面

慶応大学遠望

三田四国町

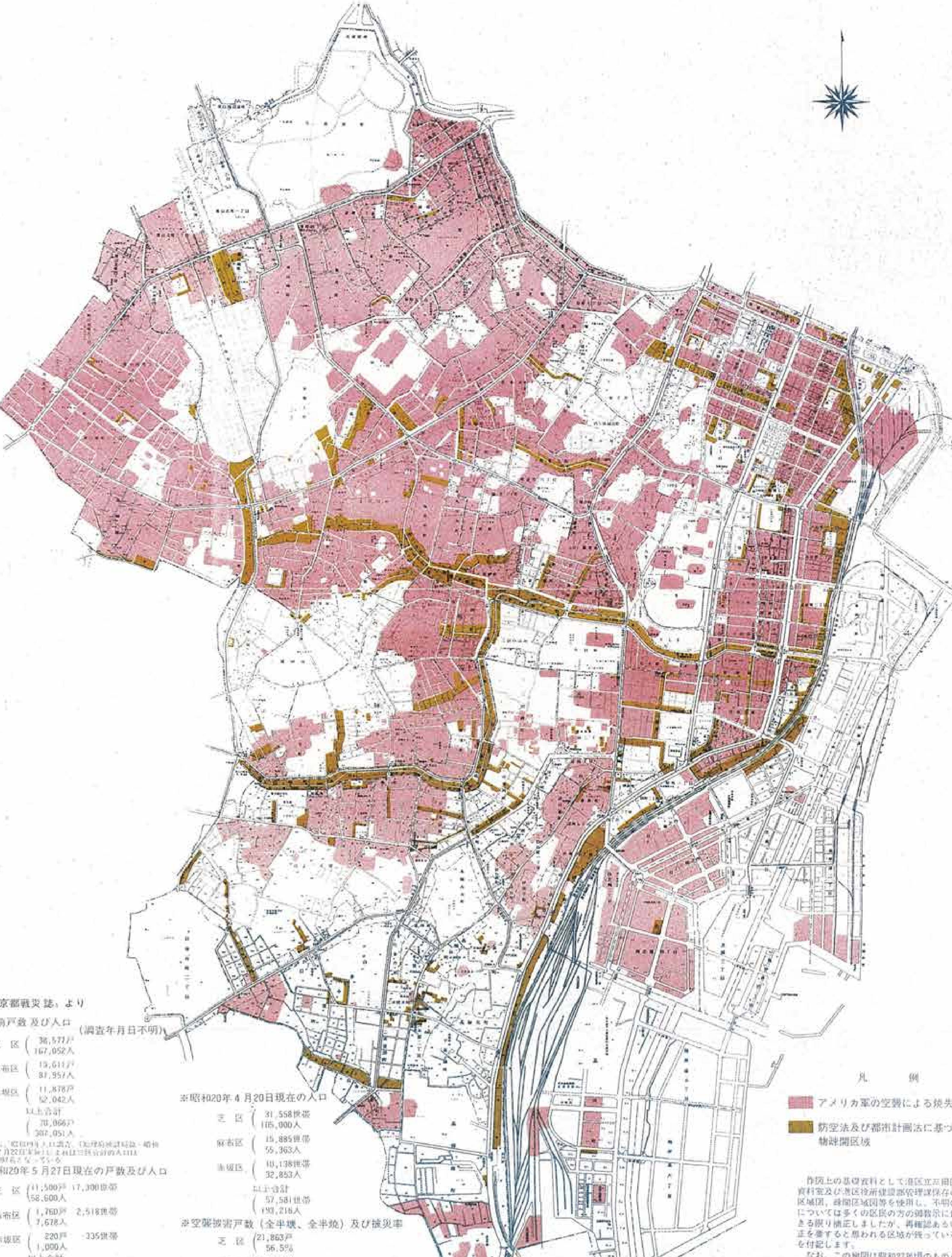
芝東京港口

あたご山

六本木

赤坂見附より青山方面

港区　太平洋戦争中の空襲による焼失及び建物疎開区域図



凡　例

アメリカ軍の空襲による焼失区域

防空法及び都市計画法に基づく建物疎開区域

作図上の基礎資料として港区立三田図書館資料室及び港区役所建設部管理課保存の焼失区域図、疎開区域図等を使用し、不明の箇所については多くの区民の方の御教示に依りできる限り補正しましたが、再確認あるいは訂正を要すると思われる区域が残っていることを付記します。

なお、この地図は昭和27年頃のものを原図としているために、昭和19年～20年当時の道路幅や区画等と異なっている箇所があります。

東京都戦災誌より

※戦前戸数及び人口　(調査年月日不明)

芝　区 (38,577戸 / 167,052人)

麻布区 (19,611戸 / 87,957人)

赤坂区 (11,878戸 / 52,042人)

以上合計 (70,066戸 / 307,051人)

なお、「昭和19年人口調査」(総理府統計局編・昭和19年2月22日実施)によれば三区合計の人口は291,997名となっている。

※昭和20年5月27日現在の戸数及び人口

芝　区 (11,500戸　17,300世帯 / 58,600人)

麻布区 (1,760戸　2,518世帯 / 7,678人)

赤坂区 (220戸　335世帯 / 1,000人)

以上合計 (13,480戸　20,153世帯 / 67,278人)

なお、「昭和20年人口調査」(総理府統計局編・昭和20年11月1日実施)によれば、芝区：67,116名、麻布区：20,697名、赤坂区：8,791名、三区合計人口96,604名となっている。

昭和22年　人口164,966名、世帯43,292

昭和53年(8月1日)人口200,202名、世帯87,580

※昭和20年4月20日現在の人口

芝　区 (31,558世帯 / 105,000人)

麻布区 (15,885世帯 / 55,363人)

赤坂区 (10,138世帯 / 32,853人)

以上合計 (57,581世帯 / 193,216人)

※空襲被害戸数(全半壊、全半焼)及び被災率

芝　区 (21,863戸 / 56.5%)

麻布区 (12,590戸 / 60.4%)

赤坂区 (10,406戸 / 83.7%)

以上合計 44,859戸

三区全体の建物の被災率 64.0%

(この数字には建物疎開による撤去家屋は含まれていない。)

港区戦争・戦災体験（第二集）の発行にあたって

平和都市宣言は終戦後四十年を迎えた昭和六十年八月十五日に区民のみなさんとともに真の平和を求めるため、核兵器の廃絶を訴え、世界の恒久平和を願って港区が平和都市であることを宣言したものです。それから二十年という月日が経過し、平成十七年八月十五日港区は平和都市宣言二十周年を迎えました。同時にあのいまわしい戦争という体験から六十年を経過したことになります。

今日、戦後この長い月日の経過とともに、戦争・戦災の記憶は薄れつつあり、こうした体験を次の世代へ伝えていくことが難しくなっています。戦時中の生の体験を形にし、次の世代へ引き継ぎ、平和を守っていくことは私たちの努めです。

港区では、この平和都市宣言二十周年の節目の年に、平和都市宣言の主旨をあらわす平和の灯（ひ）の設置をはじめ、様々な記念事業に取り組みました。そして、この冊子は、戦争・戦災体験の語り継ぎインタビューを二年間にわたり収集し、まとめたものです。また、この冊子は、平成三年に手記を集め港区戦争・戦災体験集を発行したものの第二集にあたります。しかし、発行から十四年が経過し、体験者の高齢化が進んだため、今回は手記に、インタビューによる聞き取りを加え、体験集の発行としました。

当時の辛い記憶は、多くの方が思い出したくないものです。ご協力いただいた方々は、辛い体験を語り、時には涙し、子そして孫へと伝えていくための取材に協力をしてくださいました。

ものがなく、食べるものもなかった日々。
辛い軍隊生活。
親元から離れた疎開先での生活。
そして無差別な焼夷弾による空襲。
身近な家族の死……

など、今の平和な私たちには想像することさえ難しい現実が、日々実際の暮らしだったのです。そうした貴重な体験に触れることにより、私たちは平和を考え、そして守っていかなければならないのです。

この体験集が学校に通う児童や生徒、また多くの人に読まれ、そして語り継がれることを願ってやみません。

本書発行にあたり、手記を執筆していただいた方々、語っていただいた方々、資料等の提供に協力していただいた方々に心から感謝申し上げます。

監修にあたって

人に歴史あり、という言葉があります。この本が伝えるのは、そうした「人々の歴史」です。

私たちは誰もが、一人の人間として、一度きりの、自分だけに与えられた時間を生きています。しかも、自分の意志と力ではどうしようもない、社会の大きな動きの中で、さまざまな経験をさせられます。けれども、動物と違って「言葉」を使って生きている人間は、自分自身の人生に何らかの意味を求めます。ですから、自分の生き方や経験について考え、それらにどのような意味があったのかを問い直しつつ、人生という道を歩み続けます。総力戦という、自国どころか世界が巻き込まれるような大事件でも、それを受け止めながら生き抜いたのは、結局は一人ひとりの人間にほかなりませんでした。

本書の中では、港区を中心に、日本で戦争、戦後を経験された方々が、とつとつと、あるいは雄弁に、そうしたご自身の歴史を語られています。空襲、疎開、食糧の買い出し。戦地に赴いた人。別れ別れになった家族。空襲で焼け出された子ども。困っている人々を助けた見ず知らずの方々。学校や仕事に出かけたり、自宅で夜寝ているときにも、爆弾が落ちてきた。防空壕に入った、逃げ出した、焼け出された。何年何月の何時という、一瞬のうちに生と死の運命が分かれてしまったような出来事。そして、その後の人生。そうした一つ一つの重みのあるお話しが、次々と綴られています。

戦争の話は怖い。「戦争を知らない子どもたち」として育った私は、まずそう思ってしまうのです。できれば聞きたくない、と。けれども、本書に書かれたおばあちゃんやおじいちゃんの語り口は、とても穏やかです。辛かっただろうなあ、悲しかっただろうなあ、悔しかっただろうなあ、と思われるようなお話しなのに、語り手の言葉は優しい。若い者には不思議なことです。けれども、厳しい戦争と戦後の時代を切り抜け、その後の平和で豊かな社会を自分たちの手で築いてこられた方々だからこそ、落ち着いた目で、苦しかった若い頃を振り返ることができるのではないでしょうか。

さて、変化の激しい今日、対テロ戦争のように世界では戦争もめずらしくない時代が続いています。日本では戦争の歴史もしばしば議論の的になっています。そんなとき、私たちは、何を考え、どのような道を選べばよいのだろうか。どうすれば、平和で豊かな社会をつくれるのだろうか。とてもむずかしい課題に思えます。けれども、ありがたいことに、私たちには優しい先生がこんなにたくさんいました。本書の中でご自身の経験を語ってくださった数多くの方々です。

先人の知恵を学び、未来を切り拓いていく。そうした人類の歩みは、「人々の歴史」の積み重ねでした。本書もまた、そうした歴史の貴重な礎となり、多くの方々に読み継がれていくことを、心から期待しています。

明治学院大学国際学部教授　竹中千春

凡例

本書に収録した体験記は、次のような方針で編集・作成しました。

（1）手記について　投稿いただいた原稿は原則、原文を尊重しましたが、誌面上の関係で原文の一部のみの掲載、表現の修正をしたものもあります。

（2）語り継ぎ記録について　語り継ぎについては、インタビュー形式で音声による聞き取りを行い、主旨をまとめ文章にしています。口語体でのインタビュー内容を文章にした際、わかりやすいものはそのまま用い、活字に変換した際、わかりにくいものは、語尾等を修正し、文章化しました。

（3）共通項目

① 漢字は、原則として常用漢字を用いましたが、固有名詞、手記については一部常用漢字表にない漢字も用いています。読み手が子どもから大人までを対象とするため、ご本人の了解を取りながら、できるだけわかりやすい表現・文章にするよう努めました。

② 誌面の都合上、聞き取った内容の一部を掲載しています。

③ 原文・口述内容の尊重を原則としていますが、現在余り使用していない用語は、言い換えを行っています。ただし言い換えが困難なもの、または言い換えると意味や語り手のニュアンスが伝わらない用語は、そのまま使用しています。

④ 史実については、できる限り配慮をしました。しかし本書の目的は史実を忠実に伝える歴史書ではなく、当時の個人の戦争・戦災体験談を伝えるものであるので、できるだけ体験者の記憶を尊重し、一部事実確認ができない事象・内容もそのまま掲載しています。

⑤ 本人の希望により、氏名を匿名またはペンネームとしているものがあります。

時代	年号		月日	事項
大正	大正3	1914	8月23日	ドイツに宣戦布告
	12	1923	9月 1日	関東大震災
	14	1925	7月23日	愛宕山の東京放送局より本放送開始
昭和	3	1928	6月29日	治安維持法改正実施
	6	1931	9月18日	満州事変
	7	1932	5月15日	5.15事件
	11	1936	2月26日	2.26事件
	12	1937	7月 7日	盧溝橋事件
	13	1938	4月 1日	国家総動員法公布
	15	1940	9月27日	日独伊三国同盟調印
	16	1941	3月 1日	勅令により小学校を国民学校と改称
			5月20日	東京港開港
			11月22日	国民勤労報国協力令公布（12月1日施行）
			12月 8日	真珠湾奇襲、米英に宣戦布告
	17	1942	1月 8日	学徒動員令
			3月	大日本婦人会芝支部発足、全婦人団体統合
			10月21日	神宮外苑で学徒出陣壮行会挙行
	18	1943	2月 1日	日本軍、ガダルカナル島より撤退開始
	19	1944	8月 4日	学童集団疎開開始
			10月24日	日本軍、レイテ沖海戦で連合艦隊の主力喪失
	20	1945	3月9-10日	東京大空襲
			5月24-26日	東京山の手大空襲
			8月 6日	広島に原子爆弾投下
			8月 9日	長崎に原子爆弾投下
			8月15日	戦争終結の詔書が放送される（「玉音放送」）
			9月	檜町の歩兵第一連隊、連合軍に接収
	21	1946	11月 3日	日本国憲法公布
	22	1947	3月15日	芝、麻布、赤坂区統合、港区誕生
	26	1951	9月 8日	サンフランシスコ講和条約調印
	33	1958	12月23日	東京タワー完工式
	35	1960	1月11日	檜町の旧歩兵第一連隊舎、接収解除により防衛庁庁舎に
	36	1961	9月17日	東京モノレール開業
	39	1964	10月	東京オリンピック開催（10月10日～11月3日）
	47	1972	8月	沖縄返還
			9月29日	日中国交正常化
	54	1979	12月27日	ソ連、アフガニスタン侵攻
	55	1980	9月22日	イラン・イラク全面戦争へ
	60	1985	8月15日	港区平和都市宣言
	63	1988	8月20日	イラン・イラク戦争停戦
平成	2	1990	10月 2日	東西ドイツ、国家統一
	3	1991	1月17日	湾岸戦争開始
	4	1992	6月15日	PKO協力法成立
	13	2001	9月11日	米で9.11同時多発テロ
			10月 7日	米、アフガニスタンを空爆
	15	2003	3月20日	イラク戦争開始
	17	2005	8月15日	港区平和都市宣言20周年

※この年表は、『江戸東京学事典』（三省堂）・平成17年度港区立港郷土資料館テーマ展「戦争の時代と港区」解説シートをもとに作成しました。

〈年表〉近代の戦争と港区

時代	年号		月日	事項
	4	1871		青山南一丁目に第一師団司令部創設
				愛宕町旧柳沢邸に兵営設置
	5	1872	3月23日	紀伊藩中屋敷に赤坂離宮設置
			8月3日	（陽暦9月5日）学制・学区制公布
			9月12日	新橋・横浜間鉄道開業
				芝増上寺山内松蓮社に海軍水路局、赤羽根に兵部省武庫司、
				芝公園内に海軍砲兵仮屯所を設置
	6	1873		芝愛宕下・赤坂に東京鎮台歩兵第一連隊（歩兵第一師団第一連隊）設置
	7	1874		麻布新竜土町に第一師団歩兵第三連隊創設
	8	1875	5月1日	慶應義塾演説館開館
	9	1876	12月4日	芝山内に山内倶楽部（水交社の始まり）設立
	11	1878	11月2日	芝・赤坂・麻布各区誕生
	13	1880	1月25日	芝青松寺で交詢社発会式
	17	1884	7月	芝衛生会創設
			7月	檜町に陸軍第一師団歩兵第一連隊移設
	18	1885	12月22日	太政官制を廃し内閣創設
			12月	日本赤十字社病院創設
				四番台場に陸軍造船所設置
				麻布三河台町に陸軍第一師団歩兵第一旅団司令部設置
				赤坂一ツ木町に近衛歩兵第三連隊創設
明	19	1886		青山練兵場設置
				青山北町に近衛歩兵第四連隊創設
治	20	1887		麻布区木村町に東京製綱株式会社設立
	21	1888	5月	麻布三河台町歩兵第一旅団司令部内に麻布連隊区司令部設置
	22	1889	2月11日	大日本帝国憲法発布
			4月	芝田町の品川電燈株式会社より送電開始
			5月1日	東京市誕生
	23	1890		陸軍第一師団歩兵第三連隊、麻布新竜土町に移設
				第1回帝国議会開催
	24	1891	3月	青山南町に陸軍第一師団司令部移設
			4月26日	青山北町に陸軍大学校移転
				青山北町に霞ヶ関から近衛歩兵第四連隊移設
	26	1893		赤坂一ツ木町に霞ヶ関から近衛師団歩兵第三連隊移転
	27	1894	8月1日	清国に宣戦布告（日清戦争）
			11月26日	慶応義塾学生、旅順口陥落祝賀の提灯行列挙行
				赤坂区報国会、芝区兵事義済会、麻布区兵事議会設置
	29	1896	8月	青山南町一丁目に三河台町から麻布連隊区指令部移転
	34	1901	2月1日	愛国婦人会創立
	37	1904	2月10日	日露開戦
	38	1905	9月5日	日露講和条約締結
			9月6日	青山練兵場で日露戦争凱旋観兵式挙行
	39	1906	4月30日	初の在郷軍人会創立（東京神田区在郷軍人会）
	43	1910	8月22日	韓国併合に関する日韓条約調印
			12月7日	在郷軍人会麻布区連合分会創立
	44	1911	1月16日	在郷軍人会芝区・赤坂区連合分会創立
			2月15日	日本赤十字本社芝公園に創立
大	1	1912	9月13日	明治天皇大葬、赤坂の自邸で乃木夫妻自刃
正	3	1914	7月28日	第一次世界大戦勃発（～1918.11）

目次

第一部　手記　11

（軍隊）

インドネシアと私　今澤　栄三郎　12

著書「戦場の孤影」より抜粋〈敗戦と個の確立〉（第四章より）

野口　采芽　18

鬼の巣（御著書より抜粋）　新田　朗　21

「かえり船」　六本木　馨　24

（外地）

出征・戦後の思い出　阿部　仁　27

外地での終戦　伊藤　治代子　31

（銃後）

敗戦日によせて　花田　裕子　34

忘れられない「銃後」　山名　茂登　36

（空襲）

戦争の記憶　赤星　タミ　39

我が戦災手記　伊崎　紀八郎　40

昭和二十年五月二十六日朝のこと　井上　繁　41

戦争体験を振り返って学童集団疎開の思い出　大倉　雄吉　43

空襲体験　鈴木　久代子　48

東京大空襲　長田　延満　50

「東京大空襲について」御成門中学校三年生への話　廣畑　美恵　52

東京大空襲　矢沢　咲子　55

空襲の体験　横尾　敦夫　57

空襲　増上寺と門前　米山　昭二　58

（疎開）

私の疎開記録　井上　繁　60

平和への願いを込めて　紺野　タメ子　61

集団疎開を振り返る　白石　弘　67

私の子ども時代　長田　延満　72

私の戦争体験　藤野　鷹次　73

（原爆）

平和を祈る　佐藤　恒圓　78

被爆体験　吉兼　実　80

第二部　インタビュー　83

（軍隊）
海軍での軍隊体験　浅岡　春男　84
兵役で被爆地体験　石松　勝　85
軍隊生活と鳩　佐藤　四郎　88
哀しい陸軍の兵隊さん　佐藤　孝隆　91
軍隊生活と戦後の暮らし　関口　慶二朗　92
戦争の忘れられない三つの記憶　田中　清之助　94
戦後ロシアからの帰還　津布工　三代吉　96

（外地）
満州で終戦帰国　木村　泰三　99
上海から子供と日本へ　長田　睦子　100
北朝鮮からの帰還　村瀬　俊夫　102
軍隊生活　匿名希望　105

（銃後）
お米屋がお米の買出し　石井　英一郎　107
戦時下と戦後の暮らし　稲葉　八重子　109
新潟での戦争体験　匿名希望　110
戦争と暮らし・ドングリも食糧に　太田　紀江　111
母と父の戦争　大西　勇　113
戦時中の学生時代　小浜　晋　114
家族で歩んだ戦争　加藤　とく　115
戦前・戦後の出産子育て　鎌田　君子　116
戦時下の暮らしと仕事　神谷　栄　118
戦前・戦後体験　小阪　喜代　120
七才の戦争の記憶　狐塚　房子　122
路上で丸刈り　五島　範子　123
戦時下の男の子　小林　靖彦　124
戦時下の青春　榊原　静江　127
福島での戦争体験　佐々木　千代子　129
授業で敵機の音を聞き分ける　佐々木　美紀子　130
戦時下の女学生　田子　千枝子　131
青春真っ盛りの戦争　田村　恵美　133
新婚時代の白金の空襲　遠山　フユ　134
戦時下の炭鉱、そして戦後　西宮　玉和　136
親の必死の思い千人針　長谷川　宣子　137
田舎暮しで恵まれた戦前・戦後　匿名希望　139
ザリガニ・イナゴはご馳走　福田　旺子　141
戦時下、戦後の学生生活　匿名希望　143
焼け跡は焼き畑農業　宮崎　一二　144
戦時下の青春　匿名希望　145
悲しかった兄の戦死　山碕　田鶴子　146

（空襲）
焼夷弾が足元に　秋葉　幸雄　148
忘れたくとも、忘れられない記憶　行田　重男　149
東京での戦争・戦後体験　匿名希望　151
白金の空襲の記憶　各務　和子　152
中学生時代の戦争体験　神山　三郎　155
家にスミを塗って目立たなく　北岡　修　157
戦時中の夫婦の記憶　喜多埜　定雄・良子　158
木場で東京大空襲　小島　美佐子　159
新潟から戦時下の新橋へお嫁に来て　小杉　キク　162
戦時下の新婚生活　近藤　なを　163
空襲・原爆の惨禍　斎藤　史　166
焼死体が人形の大きさに　斎藤　恭子　167
ガタガタ震えていた空襲　斎藤　昭一　170
空襲の思い出　榊原　静江　171
空襲の思い出、平和を希う　佐治　小枝子　173
お米を炒って非常食　佐藤　ヱミ子　175
空襲で赤ん坊が　酉水　雄一　177
川崎周辺は一面焼け野原　角　一郎　179
仙台で、家族八人が犠牲に　中鉢　昌　180
戦争だけは二度と嫌　塚田　稔子　183
空腹で、ホームで倒れる　匿名希望　185
兵庫県尼崎市で見た地獄　西尾　あや　185
戦後も配給で並ぶ　仁科　剛隆　187
戦時下の少女時代　野尻　昭子　188
五月の港区の空襲　八田　利子　192
三中での東京大空襲　平澤　俊夫　193
麹町での空襲　藤島　喜代子　195
秋田での戦争体験　古村　道夫　197
集団疎開の思い出から、三月・五月の空襲　細田　卓司　199
焼夷弾が雨の様に　堀　利晃　202
戦中・戦後のお話　牧石　幸栄　203
夫婦の戦争体験　山口　愛子　206
サイレンの音で体が震えた　山本　信俊　207
（疎開）
戦争で解決は出来ない平和は理解し合うことから　足立　勝弘　208
家を焼かれて家族で疎開　行田　重男　209
戦争体験を語り継ぐ責任が　伊藤　興二　210
縁故疎開そして終戦　神先　操子　211
食糧・衣料・虱の思い出　高橋　麗子　213
家の周辺は全滅　滝田　静枝　214
学童疎開の思い出　匿名希望　216

学童集団疎開の記憶　藤井　悠紀子　219
美味しかった乾燥芋の記憶　丸山内　一郎　222
疎開先で慣れない畑仕事　矢袋　治子　223
満州で働き、終戦　遊佐　敏子　224
物不足の戦後　吉田　正義　226
（原爆）
炎の中から　松永真喜子・永松立江　227

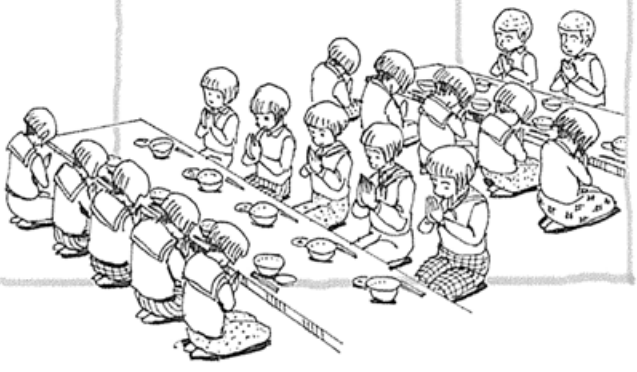
第三部　座談会　231

●戦時下の同級生と先生　232
場所…生涯学習センター
●空襲と疎開の思い出（語り部の会）　237
場所…生涯学習センター
●戦争と私　244
場所…高輪福祉会館
●港区の学童疎開・沼津学園　248
●戦時下での出産、子育て　255
場所…西麻布福祉会館座談会

用語解説　257
奥付　261

第一部

手記



第一部（手記・軍隊）

インドネシアと私

今澤　栄三郎

（一）わが青春は軍靴と共に

私は昭和九年の徴兵検査で第二乙種補充兵でした。昭和十五年七月一日、教育召集令状によって世田谷の第二陸軍病院臨時大蔵分院で三ヶ月の衛生兵教育を受けた後、昭和十五年九月末に宇品を出航する輸送船に身を委ね、玄界灘を南下したのでした。

応召する前は、橋本欣五郎大佐が組織した大日本青年党の東京府連書記でしたので、敗戦国の国民が悲惨であるかを教えられ、「勝ってくるぞと勇ましく」「東洋平和の為ならば何で命が惜しかろう」の軍歌と「西欧諸国の植民地政策下に呻吟（しんぎん）するアジア民族を解放する」という戦争の論理に共鳴していました。同時に朝鮮半島や台湾の人々を統治しているのは西欧植民地政策と異なる同胞感を認識しておりました。それも昭和十三年一月十六日の近衛声明の『国民政府を相手にせず』の文中にあった「兄弟艦（しょう）ヲ相閲ク愚ヲ止メ・・・児孫ノタメ、コノ時代ニ生ヲ享ケタ我等ガ最後ノ武器行使スル」の意図を信じていたからです。出征する時党の指導者からは「一年ぐらいで戦争は終わるだろうからアジア大陸をよく勉強してくるように」と激励されたものです。大蔵分院で教育を受けた召集兵は二百名位で内地勤務の歯科医師五、六名を残して、各方面に分散され、私たち仏印組の二十数名の配属された部隊は第五師団（広島）隷下の第二防疫給水部でした。

部隊は将校は軍医で検水、消毒、給水が主な任務で下士官・兵士凡そ二百名の編成でした。戦後の事ですが、私が部隊名を申しましたら「何だって？　防疫給水部にいたのか」「ええ、私の部隊は中国大陸、北部仏印、マレー半島、西部ニューギニアの戦線に行ったのです。」「関東軍の七三一部隊と同じ様な部隊にいて、大きな顔をするな！」と、元蒙古特務機関に居られた方から叱られました。私は呆然として、その人に返す言葉もありませんでした。森村誠一の小説に出てくる七三一部隊と間違われたのです。『悪魔の飽食』の「関東軍防疫給水部」と「第二防疫給水部」という部隊名は非常にまぎらわしいので、それは無理ないと思いましたが任務は天と地ほど違っていました。がそれと同じ「思想」から生まれたものであることは間違いありません。

常石敬一著『消えた細菌部隊』（海鳴社）によりますと、日本で細菌戦の研究がなされたのは昭和五年代の初めで細菌戦研究を組織したのは、海外研究員として欧米諸国を視察した

石井四郎軍医中佐で、先進各国の情勢を察知し、国防上一大欠陥であることを痛感し上司である小泉親彦軍医局長に上申し、東京の陸軍軍医学校に研究室が新設されたと記述してあります。

「根を同じくした一本の木」が、やがて二本の幹に分かれ、一本は専ら「攻撃」を主体とした細菌戦術部隊に、他の一本は逆に敵のこうした戦術を防ぐ部隊、そしてチフスやコレラ、マラリアなどの予防、治療、さらに「命の水」を供給する衛生部隊に育っていった――ということなのでしょう。どんな汚れた水でも、たちまちに奇麗な水に変え、チフスやコレラ菌を防ぐことのできる「秘密兵器」は悪魔の飽食に登場する石井軍医中将が発明したという「石井式濾水器」であります。駐留中は、この濾水器を二十台集結させた濾水車で大量の飲料水を生産し、トラックに積んだドラム缶で各地に分散している歩兵や砲兵や工兵など第一線部隊に配給しました。運命のいたずらというのか、戦争の必然というのか、戦争はそれぞれ置かれた立場によって、人を悪魔にも、あるいはヒューマニズムに徹した人間にもさせる証明かも知れません。

(二) 遙かなる蘭領ニューギニア

英国の誇る東洋のジブラルタルといわれるシンガポールを陥落させれば、日本に凱旋できると信じ、また復員の内命があり待機していたとき、濠州作戦とかニューギニア戦線への命令が下った。戦記で理解できたのですが、ガダルカナル島の苦戦、東部ニューギニア戦線の戦況が日々に日本軍に不利に展開していたのでした。

濠北派遣軍（勢部隊）は第十九軍（堅部隊）と共に第二方面軍（輝部隊）の隷下にあり、蘭領ニューギニアの北岸地区をマレーから轉用された第十九軍隷下の鯉兵団の一部が、南岸地区のイナワタン、バボ、カイマナ、ミミカ等に進駐したのは昭和十八年一月の頃であった。私はその鯉兵団（第五師団）の一兵士です。

チャンギー兵舎は南十字星があざやかに傾いて、異国の風景らしく郷愁をおぼえアジアの大地から白人を追い払えば、アジア民族の黎明が来ると信じていたシンガポール島が消えていきました。これからは三百五十年の間、オランダの植民地政策の犠牲になっているインドネシアの民衆を今こそ救うのだという気負いに私の心は昂ぶっていました。蘭印といわれていたジャワ島は既に今村均将軍の第十六軍（治部隊）によって善政が布かれていました。赤道を超え南半球で初めて見る陸地のジャワ島を望見し、首都バタビアの玄関であるタンジョンプリオーク港に入り、港に着くと兵隊の常である使役という作業があります。輸送船の積荷を貨車に積み込む重労働です。夜間作業で空き腹に炊き出しの握り飯が美味かっ

たこと、翌朝はバタビア（現ジャカルタ）は駅だけに停車して東へ東へスラバヤに向かいました。「みはるかすバンドンへの道は信濃路を偲べり」とジャワ派遣軍報道班の詩人、大木惇夫が旅情をうたっていますが、オランダの植民地時代、列車は現住民であるインドネシア人と中国人は差別され椅子のない貨車のような粗末な車輛に乗っている実情に義憤を感じたものです。

スラバヤ港からは、敵潜水艦の跳梁するバンダ海を巡洋艦青葉に護衛されアンボンを経て蘭領ニューギニア（現ジャプラ州）の島の頭の形をしたヴォールゲルコック半島とボンベライ半島の奥深くにあるバボの桟橋に輸送船は着きました。

ニューギニアといえば、百四十年前、イギリスのウォーレス（一八二三～一九一三）が八年の歳月をかけてインドネシアの島々を旅し、森ではオランウータンを捕らえ、スラウエンの山の中で珍しい蝶を採集し、アルー諸島では極楽鳥を探しながら、オランダやイギリスの植民地経営を観察したといわれていますが、ウォーレス線とは生物地理の重要境界線で、日本では明治時代、南洋研究者、菅沼貞風著「新日本図南の夢」には、住民は縮毛の黒人種族とあり、私には未開の瘴癘の大地としか知識でした。バボはオランダが石油輸送管を設置し、衛生面ではアノフェレス蚊を絶滅しマラリア疾病の予防に務めたモデル環境地域でした。

（三）残照のアラフラ海

ベラウ湾の南岸バボから敵の爆撃を避け、カソリという小部落からアラフラ海に面したカイマナの防衛隊に合流したのは、昭和十九年の初めだったのだろうか、西村楽夫という漫談家がホーランジャ（現ジャヤプラ）基地からの帰途、カイマナに寄って慰問に参りました。はっきり覚えているのは四月二十九日の天長節の前夜、空襲があり海岸沿いにあった糧秣倉庫が炎上し、翌朝兵舎の周囲に不発の焼夷弾がゴロゴロ転がっていました。爆撃の夜、カイマナ防衛隊（野砲連隊）長中平峯吉大佐から部隊本部に見舞いの伝令があり、直ちに答礼の命令が私に下り、夜闇の中で幾度か空襲があり、そのたびに防空壕に身を潜め、ようやく防衛隊本部に着き、火事現場のような混乱の中で、報告した副官は大横田勉大尉で、ロサンゼルス・オリンピック大会の水泳選手であることは後日、知りました。

カイマナで現地自活という言葉が使われ始め、塩作り野菜作り、漁撈班が編成され、原始人へ回帰生活の端緒となりました。製塩班には私の班（消毒斥候班）の飯笹太郎吉さんが選ばれました。宿舎から数粁離れた燃料にことかかない雑木林を背後に海水をふんだんに汲める海岸の傍に建てた仕事場に顔を出したら、塩作りのコツを説明してくれた。燃料はマングローブの生木が効率が良く、釜はドラム缶を継割りして

半分にして使い、海水を煮詰めるとニガリが生じ、やがて塩の結晶ができる。ニガリの色は淡黄色で、ねばっこくドロドロ状になり塩を徐々に掬い水切りして一丁あがりです。

空襲の合間のある日、沖縄の漁船が入港して地引網をしたことがあり、大漁で久し振りに歓声をあげ戦場を忘れさせてくれました。休日のある日、軍医将校に誘われて外出禁止区域の原住民の部落に行ったことがあります。越野達郎という産婦人科医師で血液学の権威でしたが、軍隊に手術ができるので召集されたのでした。原住民が医療に恵まれていないので、良心的に治療を行っていて、村長をはじめ部落の人々から信頼され感謝されているのを目の前で知りました。

カイマナからアラフラ海に浮かぶケイ諸島のトアールにあった師団司令部に移駐することになったのは、やっと現地自活体制に目鼻がついた頃でした。作戦中の軍隊の行動は、自力で次の兵舎の建設から新規まき直しの作業が待っています。機帆船、大型発動機船（ダイハツ）でアルー、タンニバル、ケイ諸島へ何回にも分けて出発しました。

カイマナからミミカに派遣されていた須田隊（須田泰守軍医）では、望月誠さんと原忠義さんが敵機の機銃掃射で戦死。カイマナの沖で部隊主力の乗船した機帆船が港内で機雷に触れ海岸で見送っていた私の目前で轟音と共に水柱が立ち、あわやと思ったこともありました。次のダイハツに乗った田中二三男さんは予備役の上等兵で温厚な囲碁の上手な方でしたが機銃掃射をうけ戦死。僚友の青木栄次郎さんは脚部貫通銃創で生命はとりとめました。私は最後近く小舟艇で河村孝三郎さんと二人旅で独立工兵隊の舟艇で追及しました。島の名は忘れてしまいましたが、途中で一個小隊が警備していた小さな島に一泊しました。濠軍が一回も爆弾を落としに来たことがないといい、豚の子が仔犬のように尻尾をふりふり兵隊の跡を追い馴れついている有様は一幅の画でした。のどかな田園風景で鶏の鳴き声も、人間同士の醜い陣取り競争の世界とは別世界にきこえておりました。

ケイ諸島には、高ケイ島、低ケイ島、ヅロア島を中心に濠州とニューギニア島の間に珠玉を散りばめたように点在しています。アルー諸島、タンニバル諸島に行くにはターミナル的な位置にあるトアールはケイヅラ島の南部にある第五師団司令部のある枢要な軍事拠点でした。サイパン島玉砕（昭和十九年六月五日米軍上陸、同七月六日陥落）の報があって以後、敵上陸に直面する覚悟を決意したのも、この地でした。

（四）現地自活の日々

現地自活は師団司令部の作戦命令によるもので馬渕逸雄参謀長の指導によって企画されました。私の部隊でも農耕班、漁撈班、狩猟班、物質募集班など適材適所に兵隊が任務につ

きました。師団司令部のあるトアールから五粁ほど北上したヅラという小部落でした。幸い本隊の兵舎は上空は樹林によって遮蔽されて敵機の目標から外れていたのでしたので安全地帯でしたが、大島末吉さんという初年兵はヅラの桟橋から兵舎に至る道路で作業中、敵機に遭い戦死。同年兵の所登さんによるとタンニバルを防衛していた歩兵第四十二連隊の検索業務とマラリア撲滅の防衛業務に従事していたが、肥田良一軍医大尉が敵機の機銃掃射で戦死。福本美好衛生曹長は細菌検索作業中に殉職しました。

同じタンニバルのサムラキ分遣隊に派遣された古年兵の一人である梅本清之さんの手記によると「南半球の海は南洋といえども荒れている季節風のなかトアールを出発し、ローリング・ピッチングのはげしいダイハツ（小型上陸舟艇）は途中、タンニバル諸島北端リタベルに立ち寄った。生い茂る雑草の中で一段高くパパイアの樹があった。何気なくその根元に目を移すと墓石があった。和歌山県の某女と記してあった。うら若くして散った南溟の史碑である。かねて聞いていた往時の、パンダ海、アラフラ海方面で天然真珠採取のため、はるばる出稼ぎ身を挺した人の軌跡であった。後に御木本幸吉翁の養殖真珠の成功で、このような出稼ぎの悲劇がなくなり、日本の真珠輸出にも貢献したのである。」

ケイヅラ島の本隊で部隊長の森本宏軍医少佐は兵隊の中で東京工大紡織科出身の一兵士の上田二郎さんに現地の材料で原住民の貴重品である布を作る方法はないかと研究を命じられました。上田さんは隊長命令で自由行動をとり、遂にパイナプルの葉が繊維を作るのに適していること、織機を作るのにはマングローブ等の木を用い、その作製には兵隊の中から施盤工など機械工出身の兵士の協力によって試作品を製作することに成功いたしました。これが師団生産隊に報告され織物工場が建設され高ケイ島に二十台の織機によって操業され、この織物が原住民の生産した食糧と交換するようになり高く評価される貢献がありました。一般の部隊の食糧事情は農家あるいは漁業出身の兵士の経験によって生命の維持が保たれたことは疑いもない現実であると思います。主食は経理部から支給されるタピオカ芋でありました。そのタピオカを自転車のペダルの廃物利用で、おろし金で搾るより大量に粉砕し澱粉を作り、水に一晩沈めて青酸を含む種類のタピオカには神経を尖らせました。コプラ（古い椰子の実）を粉末にしてタピオカ澱粉に混ぜた代用食とし、精米（二俵）は敵の上陸時に備え経理倉庫に確保しておりました。

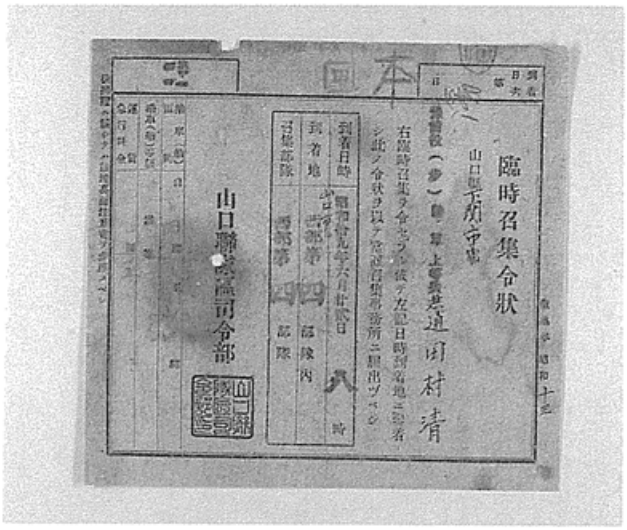
戦後、内地の食糧事情の著書を読んで戦地は当然であるが、「昭和十九年七月三日、政府は閣議で主食の一割減を決定し直ちに実施を発表、石黒忠篤農商相はイモのつる、桑の実、ヨモギ、どんぐり、南瓜などによる代用食を大いに奨励せねば

なりません。籾穀だって食わせるのであります」と、これでは、われわれ南の孤島での自活体制と似たり寄ったりであります。銃後の内地の人々にこんな思いをさせるため、歓呼の声に送られて戦場に赴いたのではなかったのです。

第五師団の将兵の本隊はケイ島から昭和二十一年六月二十四日、セラム島の将兵は同年六月十二日、和歌山県の田辺、三重県の四日市に夫々復員しました。私の部隊の還らなかった戦友は小田原市出身の水泳教師の酒井米吉さんは明朗な青年でしたが、マラリアに感染し状況の良いジャカルタ陸軍病院に護送され再びニューギニア戦線の原隊復帰の途次、ジャワ沖で敵の潜水艦の魚雷攻撃で戦死。アルー諸島でマラリア再発のため、栄養失調に悩むニューギニアから設備の良いフィリピンが最適と判断し、マニラ陸軍病院に入院のため護送された白根薫さん、井上久義さん、石森正人さんは、原隊復帰も空しく未帰還であるから、おそらくフィリピン攻防戦に遭遇したものと推定しております。私がセラム島のマカリキで敗戦を迎え、復員船入港の近いの知りながら深川木場育ちの生粋の江戸っ子軍曹、宇田川勝太郎さんは、マラリアの熱帯熱と三日熱の混合感染で突如、発熱し死亡しました。

人間の運命ともいうべきか、人智で図り知れないものをつくづく感じております。「戦争で起こってしまったことに対する罪を問う時代ではありません。そこから学ぶべき責任を問う時代です」とはドイツで反ファシズムで死刑になったマルク・ローテムトという映画『白バラの祈り　ゾフィー・ショル』という二十一歳のミュンヘン大の女子学生の言葉が耳に残ります。

暴力や憎しみを断ち切るため、わが国だけが悪いのではない。他国もやっているという模倣の論理は「どっちが先にやった」というのと同じです。



東京都

第一部（手記・軍隊）

著書「戦場の孤影」より抜粋
〈敗戦と個の確立〉（第四章より）

野口　采芽

この眼前に展開する砂浜に米軍が上陸する可能性ありとのこと、我々の訓練も一変した。我々一同に小型シャベルが支給された。これで眼前の広大な砂浜にたこつぼ穴を掘る訓練が始まった。一つ掘って身を沈め、又その穴を抜け出し、次に前進穴をほる。百メートル先には、私の身長の倍程の、板作りの巨大なタンクが横たわっている。このタンクの側壁に向かって何個めかに作ったたこつぼから飛び出して這い上がり、そのタンク上の扉をこじあけ、爆弾を車内に投げ込む。話としては勇ましい。多分演習としてのみ可能であろう演習を毎日おこなうことになった。このたこつぼを掘り始めて二～三日経た日、飛び込んできた情報に我々兵士は驚いた。新型爆弾が広島に投下され、広島が姿を消したという。

そうなると俺が何ヶ月か前に掘った比治山のたこつぼは、又船舶砲兵隊本部は、思いは夢のように頭に去来する。この小隊の総司令官の尉官クラス将校の出身も広島であった。彼は休暇をとって広島に行った。そんな日の昼食時、我々六畳間の歴戦の古兵の座する部屋で面白い珍談が始まった。“おい、今度広島に投下された、爆弾の正体は何か”。最年長の老上等兵殿がおごそかに、然し笑みをうかべてのたもうた。それは我々聞く側にはこと細かい科学的説明が必要な発言だった。彼は俺の情報には狂いはないという確信に満ちた顔。然し半ばうつむきかげんにのたもうた一言曰く、あの中身は男子の精子の集合体のようなものらしい、何か正に意味不鮮明なご宣託である。こんな日の或る朝空襲警報が空気を震わせた。空を見上げる。昨日まで続いた晴天の空は、飛び上がれば手の届かんばかりにたれ下った黒雲で覆いつくされている。こんな黒雲を見たのは筆者の長い年月でも恐らく最初にして最後の光景であろう。正にまか不思議な天候としか表現方法がない雲の様子であった。然もこの現象、遠い戸畑の街も、又反対方向の八幡製鉄所の上空も、この異常に地上近くまでたれ下がって広がる異常黒雲に覆いつくされている。依然としてこの異常黒雲を突き抜けて、空襲警報は周囲の空気を震わせている。私はむしろこの異常黒雲にどぎもを抜かれ、家の前の一～二人用防空壕に飛び込んだ。頭上には戸板が一枚あるのみ、米軍機は完璧に近く黒雲に閉ざされた八幡製鉄所上空を数回旋回していたが、その米軍機は機首を西北方らしき向きに変更。爆音は西北よりの空に消えていった。空襲警報解除と共に私は頭上の戸板をはね上げて地上に出た。上空を見上げると黒雲の間を縫って、妙に輝く薄く細長い金属片が

ヒラヒラと何枚もあちこちに舞い降りている。これは後程判明したことであったが、米軍は日本が未だ開発しなかったレーダーを日本軍もすでに所有と判断。そのレーダー防止用の器具がこの金属片であったのである。米軍のこのレーダー兵器はミッドウェイ海戦等多くの戦場で使用しており、このことについては前述してある。

又以下のべることも後日判明したことであるが、この日我々の頭上を旋回し、黒雲のため原爆投下できなかった米軍機は、原爆を搭載したまま我が駐屯地より北西の長崎を目指し飛行、その上空わずかな雲の隙間より長崎市にこの恐るべき原爆を投下したのである。

余談になるが米軍の広島、長崎原爆投下作戦前、即ち沖縄作戦終了後の作戦行動は決定していた。この行動は当時すでに実行の初段階にあったのが南九州上陸作戦であった。上陸地も七、八ヶ所その上陸地点は米軍らしく、すべてにフォード、クライスラー等々の自動車製造会社の名前をつけ戦艦、巡洋艦、上陸用舟艇等に沖縄作戦をはるかに超える大部隊の完成。その中で注目すべきは鹿児島の地形が沖縄弐に似て岩石と岩穴が多いとして、沖縄戦であまり使用しなかった毒ガスを非常に多量に用意した正にその作戦に入らんとした時。アメリカ国防総省及び大統領の決定が日本への原子爆弾攻撃ということであった。この当時といえど原子爆弾は米国の実験場で三～四個しかなく完成しているには広島と長崎投下の二個程度という。九州南部上陸か原子爆弾か二者択一の場面で米国大統領は後者を選んだものであろう。原爆投下から何日を経て民家の別室に整列した我々は天皇の終戦宣言というよりは敗戦事実を眼前に置かれた時代物のラジオがとぎれとぎれの音声で伝えるのを聞いた。ああこれで日本は救われたのだ。私は思わず傍らに建つ便所に飛び込んで、一人で日本万歳とやってしまった。

この日を境に総ての軍関係兵器は引き揚げられた。軍帽の或いは軍服の星マークは取り除かれた。この姿は田舎のオッサンと何等変わりはない。然し半ば軍律めいた余韻は目に見えない形ながら残っている。この敗残兵集合体の中から気の合う人物と密かに話し合った。それは今晩この広い駐屯地を脱出、あの岡の上に建つ活動写真小屋（映画館）にもぐり込むという話である。話は早速合意。この砂浜を含んだ広い地域は、今日も鉄網で囲まれているだろう。私と彼が目的とするあの館まで辿りつくにはこの鉄網を越えなければならない、我等二人は宿舎をでるなり、今は着用の必要がなくなった、又今晩の行動目的の為不必要な軍服をぬいだ。次にこの暑いというのに持参の手ぬぐいでほっかむり、素人泥棒そこのけの姿となり鉄柵をのり越えた。映画館の裏口に回りほっかむりを深い鉢巻姿に変え表口へ。そこで五十銭を支払い階段式

の館内を一気に最上段へ。二本立ての陽気なミーハー俗の喜劇であった。

　然し東京では時の陸軍大臣阿南惟幾（あなみ　これちか）大将が自室で割腹。古式に従った介錯人不在、半日以上廊下で苦しんでいたとか。又その自分の腰にあるピストルで命を絶った優秀な陸海軍の将校は多数を数えた。然し丁度その時、軍需品（当時の庶民が望んでも絶対手に入らない衣食住関係の貴重品）を内地駐屯軍の日本軍本部にトラックに満載して山路を走行していた車が、指揮官の将校と何人かの兵もろとも行方不明となったという。今でいう刑法の官物横領罪に値する行動であり、このような事件は特に日本内地の至るところでおきていた。大型悲喜劇は一々指を折っていては追いつけない数であった。ここで我々が演じた行為は児戯にも類しない遊びに属するものであろう。私がここで申し上げたいのは規律規律でがんじがらめな生活を強いられた人間程、その規律から解き放たれると人間本来の姿に立ち返らんとする意欲に支配されるということである。何日かこの民家で無気力な団体生活を続けている時、従来の軍指令にあらざる集団の移動通知がこの無気力な集団に届いた。

　我々の集合地点は門司の或る大きなお寺であった。このお寺の本堂には各地から来参集した各種の部隊集団が、ところ狭しととぐろを巻いている。その寺のよこの山道を大きな背高の外人が松葉杖をついて歩いてきた。その横にはかつての日本軍看護兵が二、三人寄りそっている。彼は足を引きずって視界から消えた。話によると十日程前我が小隊の家屋上空で日本軍戦闘機と一騎打ちで撃墜された米軍戦闘機乗員とのことである。私もこれは目撃している。時間にして二十秒程一機対一機の空中戦であった。夕方になると寺の夕暮れはもの淋しい。眼下に街の姿、灯が見える。一ヶ月程前上海から門司港に入港しようとし、米軍敷設の磁気機雷（日本海軍掃海不能）を受けて命からがら下関海岸に上陸後、憲兵に補導された日の夕方の上空を、米軍大型爆撃機ボーイング十機程低空飛行で下関上空に飛来、そのはるかな上空を日本の高射砲隊の砲弾が花火のように無数に炸裂していたが、その光景夢のようによみがえる今宵の上空は実に静かだ。

　夕闇せまるこの境内で身体のみ元気、気の抜けた旧軍の将兵が、この古寺の庭で一斉に食事している。各人の食事の世話をしている私を指さして、〝おい貴様は上等兵だろう〟肩章などとっている私に向かって大声で言っている。今更、兵の階級など一体何だ。本来なら私は憲兵だったのだ。つい無意識感情が出てくる。今のこの規律ある三百名近い集団行動を見るのもこれが最後か。然し何という平和な光景か、淋しさも、ものうさも一切打ち消す心の平和をしみじみ味わうことのできるあわただしい夕餉である。

野口さん本人

第一部（手記・軍隊）

鬼の巣（御著書より抜粋）

新田　朗

（まえがき）

太平洋戦争の敗色濃くなった昭和十八年、食糧も少なくなり、代用食も配給、竹槍の防空演習の明け暮れ、家庭の主婦までかり出されていた。そんな頃、私は、印刷会社のサラリーマンだったのだが、国家非常事態の折り、軍事産業に協力せよとの、徴用令（国家命令）を受け、川崎の日本通信工業へ動員されていた。その二年の期限内に赤紙（招集令状）がきて、第二補充兵役の私も、昭和十八年十二月一日相模原の陸軍兵器学校へ入隊する事になった。当時は、子供の頃から、軍事国家の国民として、教育を受けてきた。大人が子供に対する社交辞令も「坊や、大きくなったら兵隊さんだなぁ大将になるんだなぁ」そんな時代の青年の一人として、さして抵抗感もなく、応召した。その時、母は重病の床にあったが、その枕辺に手を付いて「征きます」と頭を下げた「行って参ります」とは、行って帰る事だから、「征きます」には死を覚

悟して、帰らぬ意味があった。今、子を持つ親としては、残酷な言い方だったと思う。当時の軍隊生活を、はっきりした記憶と、記憶違いの部分も綴り合わせて、想いだすままに書きとめてみようと思う。

（敗戦への所感）

入隊して、水戸の航空通信学校へ転属、間もなく全員が一等兵に進級、入隊当時は毎日ビンタの嵐、星が二つになると、余程のミスを犯さない限りビンタは食う事は無くなり精神的にも落ち着いて、戦争への批判を考えるようになる。東京は絨毯爆撃でやられ、水戸市内も焼け野原、敵B29に匹敵する様な飛行機は無し、大本営発表も眉唾物、昭和の初期から対中国戦で大分疲弊している我が軍が大国アメリカに勝つ事は難しいのではないか、いや、負けるのではないかと考えるようになったが、これは自分で思うだけ、うっかり漏らそうものなら国賊扱いを受ける。軍のお偉方の考えは、頭にチョン髷、両刀を差した様な時代錯誤の人が多いのではないか、中には判断を誤らない人もいたに違いないが、大勢の赴くところ口が出せなっかたのであろう。若しこの戦争に負けたらどうなるか、我々は敵国から奴隷扱いを受ける事になるのか、そんな不安が心の片隅に居座っていた。

（ビンタの種類）

手のひら、拳固、上靴（スリッパ革製踵に積み革あり）帯革（西部劇のガンベルトの様な巾と厚み）巻脚絆（ゲートルを堅く巻いてある、音はしないが痛さは芯まで応える）大の男が力一杯頬げた目がけて（但し急所は外す）帯革びんたの場合、上半身裸体、「体を前に支えっ」で背中目がけて、ばしっ、ばしっ、とやる、三、四センチ巾に襷がけのミミズ腫れになる。軍人精神注入棒＝六十センチ位の木の棒、これで殴る事もある。

※他に兵器学校では、文句を並べた後！「オォッ、ソノォー」と付け足し古参兵らしさを誇示する。

通信学校では、それが「アーッ、コノゥッ」と言う。「こらっ、銃が下がる、しっかり、捧げ銃だ、ほら、言って見ろ、九九式短小銃殿って言って見ろ」その、馬鹿馬鹿しい文句を、大真面目な顔をして、言わされる、ぶつぶつ区切りながら、力強く言おうとすると、「駄目だ駄目だ、もっと、ふんわりと、節をつけて、やって見ろ、ほらっ、銃がさがるっ」

また〝犬〟と言うのがある。編上靴の手入れ（靴紐も時々洗濯をする）がわるかったり、怠ったりした場合の罰である。編上靴の紐を両方長めに結び合わせ、四つん這いのまま、古参兵の前へ行き、「何某は、編上靴の手入れが悪ので、注意を受けました〝ワンッ〟」と吠える。そこで一人一人ビンタかお説教

を食う、幾人にもやられるので、これは大変こたえる。まだある、これは罰の形式の一つで、「蝉〝みぃーんみぃーん〟」と、柱に掴まって蝉の鳴き声をするのである。尻をたたかれる、二年兵たちは、周りで、笑いながら、やじを飛ばしながら、鑑賞する。「今年は蝉の鳴きが悪いぞ、もっと、しっかり鳴け、声が小さいぞ」その他、〝鶯の谷渡り〟がある。これは、班内の寝台を、一つづつ、くぐっては〝ほーほ、けきょ〟と、鳴く、一つくぐっては、〝ほーほ、けきょ〟と、鳴く。「こらこら、鶯がお前みたいに、どら声で鳴くか、もっと可愛いい声でなくんだ」

また、自転車というのがある、机と机の間に手を付いて足を浮かせ、自転車をこぐまねをするのです。「ほら、今、郵便局の前だ、ほら今度は上り坂だ。上り坂はそれらしく、こげ、ほら、今度は、左、上官だ、敬礼せんか、こら、自転車ひっくりかえるぞ、頑張ってこげよ」これらの罰は、肉体的辛さより、大いに自尊心を傷つけられる。伝統的な申し送りで、昔から続いている様である。

意地の悪いのも。ようやく寝台に入って寝て間もなく、「班内当番は誰だ、起きて来い、今日、たん壷の水を取り替えたか、見てみろ」取り替えた筈の、水に、誰かが唾をして、唾が浮いている。当番が、「取り替えましたっ」「取り替えたのが何で、汚れてるんだ、あーん」と言う訳で班内当番は総員、びんた、満期節（唄）にもある。〝整列びんたのそのあとで、たん壷磨きの哀れさよ〟伝統的に、初年兵が入る度に、やる、いじめの一つである。

毎日新聞

「かえり船」

六本木　馨

出航用意！　艦長佐藤重吉元海軍大佐の声が、伝声管を通して伝わった。〝両舷前進、微速ヨーソロー……〟〝航海士の声が続く、〝手の空いている者は、総員上甲板に出て帽振れー〟。見れば、浦賀ドックの皆さんや、下宿のおばさん達の手を振る姿が、遠ざかってゆく岸壁の上に見えた。全速十五ノットの浦賀水道の波を切って、高栄丸は、一路南下した。目指すは、旧南洋諸島の一角、クサイ島、時に昭和二十年十一月の初旬。私自身、海軍に志願して始めて乗った船が、遠洋航海するに至るとは、夢想だにしなかった。

望郷千里、夢に見るであろう故郷日本への帰国を、一日千秋の想いで待ち侘びる、同胞を迎えに行く船であり、当時の世の人は、引き揚げ船とも復員船とも呼んだ。復員局の正式名称は、特別輸送艦〝高栄丸〟七千八百屯。青森大湊港より浦賀ドックに艤装のため、回航された旧日本海軍の機雷付設艦であった。

船体はライトブルーに、船腹には、大きく鮮やかに日の丸が塗られた。船内は、一箇月あまりをかけての大改装。三段の船倉は大船室に、甲板には、食事用の大釜がいくつも据え付けられる。最大収容人員は、二千人とも言われた。クルーは、全員元海軍横鎮出身の兵士で構成され、軍隊当時より引き継いだ命令と、呼称で、艦内で帰還者に向けての対応作業に従事した。居住区には、元士官クラスは個室のベッド、元下士官兵は大部屋での釣床生活、通訳には、元海軍大尉の武田さん。皆さん共に、話の分る良い人達ばかりだった。

思い起こせば、八月十五日の正午、横須賀は、旧海軍砲術学校の校庭前、天皇の放送があることは、前々から知らされて居た。ラジオから聞こえる言葉は、雑音が多く、意味が深く聞きとれないままにも、戦争が終わったことだけは、分った。

翌日より、武器の投棄と書類の焼失、俄か仕込みの英会話の自習が始まる。忘れもしない八月二十二日、「この中の次男、三男は東京に行く、分ったな！」命令はストレート、そして二十人位だったと思う、隊を組み、衣裳を担いで横須賀を離れる。そして品川の旧海軍経理学校で一泊、そこで、海兵団当時の友、秋田県出身の堀田と偶然にも出会う。空母に乗って、ボカチン（轟沈）に合ったと言う。別れを惜しみ、着任地は、新橋の桜田小学校（現港区生涯学習センター）。任務は、保安隊要員。内幸町にあった旧海軍艦政本部（元日産ビル）に、昼夜に別れて交代で、警備の任務、小学校講堂での雑魚

寝は、暑かった。十日間位居たと思う。それからが大変だった、トラックに乗せられ、露営の生活が始まった。夜露朝露に打たれながらの、野宿を続ける。居場所など知る由もない、だが荷物の運搬作業は続いた。あの頃は若かった、なんでも出来た、疲れも一晩寝れば快復した。よく続いたと思った。九月十日近く、浦賀造船所に辿り着く。そして、任務の命がはっきりし、高栄丸と出会うことになる。

太平洋は、広く果てしない。デッキに上がっても、耳にするのは、スクリューを回すエンジンに音が、ゴストン、ゴストンとはね返って聞こえる。イルカが、付いてきて、飛ぶ。南に下がるにつれ、鯨の潮吹き。天と海につながる竜巻とも出会い、スコールが来るのを見れば、甲板掃除をした。南海の島々は、穏やかだった。透き通った珊瑚礁の海に泳ぐ魚に、目を見張り、夜空に仰ぐ南十字星に、人知れぬロマンを感じたものだった。一週間の船旅の終わりは、現地で見張る米軍の艦艇に、緊張した。乗船してくる人は、南の島では全員が飢えに喘ぐ、元軍人！　そして、旧南洋諸島は、クサイ島、ホナペ、パプアニューギニア、ウエワクと、迎えに回った。遠くは南半球の果て、オーストラリアのメルボルンに、片道二週間余りをかけて行く。そこでの帰還者は、全員が在留邦人、中には、白いゴム服を被った〝レプラ〟と云われた人も、乗船された。

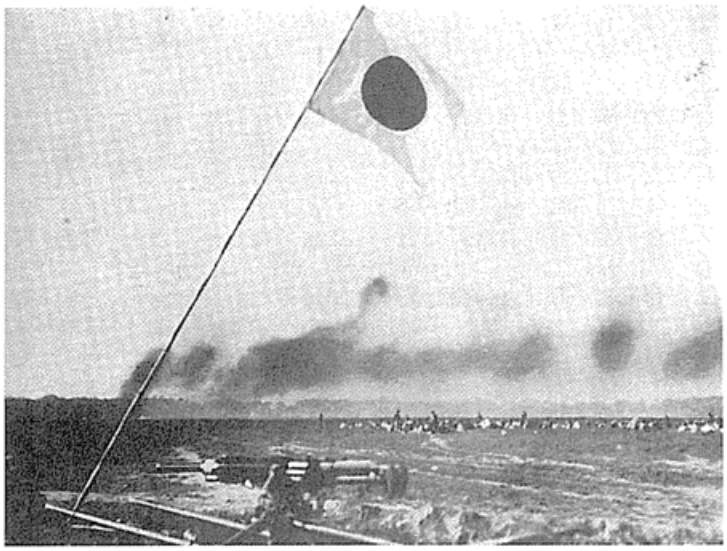
航海中に悲しかったのは、故郷を目前にして、無念にも亡くなった、同胞の水葬の儀式があった事です。遺体は毛布でくるみ、日章旗で覆い、後甲板より、太平洋の海中に葬った。「敬礼！　全員黙祷！」艦長の声、ラッパの音と共に、海中に落とされた亡き骸は、泡をふくんで、静かに沈んで云った。ゆるりと艦は、亡き骸を囲むように一周する。汽笛が、ボーッと三回鳴り、空しく響いたのも、忘れられない。その時、海はただ黙っていた……。

さて途中、艦の修繕、燃料物資等の補給で、思いもかけず鹿児島、大竹、呉、神戸、長崎に入港、一休みをした。そして、終戦後の翌年の六月、旧満州の南（現中国遼寧省）へ、三度船脚を向けた。浦賀より片道三日、朝鮮半島を越えた遼東湾コロ島の波止場、接岸した際には、中国の警備の物々しさに、目を見張った。疲れた体を引きずって、桟橋を上ってくる裸一貫の在留家族を追い立てるように、銃を構える中国軍の警備兵、甲板で、覗き見ていて、気が急いだ。早く乗って！　早く！　言葉のない気持ちが、焦った。帰還者で満席の船路は、気も軽く、賑やかである。船内の大勢の人に、尋ね聞かれる話は、故郷のこと、日本の現状であったことは云うまでもない。南方から、北からの人々にも、一つ共通する顔があった。船が日本に近づくに連れ、島影が見えた時、又、南方からの船路で、最初に大きく見える、八丈富士の島影に

は、「オーイ、富士山が見えたゾー」の声を聞く。甲板で、食い入るように見つめる帰還者の顔、顔、顔、「オッー」とのつぶやきとも知れぬ声と共に、安堵の頬がゆるむのが見え、言い知れぬご苦労をなさったと、受けとめた。「国破れて、山河あり」とは実感する。

当時の思い出は、懐かしく語りつきない。昭和二十一年八月三十一日、浦賀で下船、久里浜で復員する。十七才の、夏でした。

この年の暮れ、この歌が流行った。「♬波のー背の背に～揺られて　揺れて～　月の潮路の帰～り船～……」、今でも、このメロディーを耳にする度に、私は、瞼を熱くする。遠く、六十年前の出来事でした。



毎日新聞